

南アジア周縁地域の開発と環境保全のための 当事者参加による社会的ソフトウェア研究



責任機関: 京都大学(東南アジア研究所)

研究総括: 安藤和雄

研究期間: H19年度～H21年度

ニーズの背景



問題の所在①

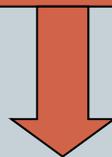
- 農村地域の貧困 (限られた土地資源と巨大な人口圧力)
 - 貧困軽減の対策としての近代農業の過剰開発
 - 生存のための開発が引き起こす新たな環境問題
 - 例) 灌漑稲作の拡大⇒地下水ヒ素汚染
 - 森林伐採による開墾⇒土壌侵食
- ☞ 開発と環境保全の両立 = 二律背反的問題
- ☞ 公益型環境問題 (⇔公害型環境問題)

問題の所在②

- 援助が末端の草のレベルに届かない

研究提案書に示した目的＝ニーズへの対応

- バングラデシュとネパールにおける「公益型環境問題」(＝二律背反的な問題)への対応
- 各NGOが蓄積してきた成功例、失敗例、実行例から「社会的ソフトウェア」の掘り起し
- 解決策の現実的な実践活動の糸口を発見
- 研究成果の利用主体となるNGO、開発コンサルタント、ODA関係者の事業計画時に参考となる提言

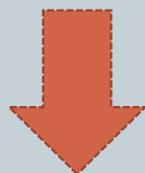


場に立つという自覚にもとづく当事者的直観を重視する地域研究＝実践者との協働による地域研究の試行

プロジェクトの目的



- バングラデシュとネパールにおける開発と環境保全への対応策を、当事者的視点(主に、草の根レベルで問題解決に取り組んでいるNGOの経験知)から**実践者と研究者の共同研究**により見出す



「社会的ソフトウェア」:問題に直面している人々の経験知を収集し、それを利用可能な体系に**整えるメカニズム**



プロジェクト 流れ

👉 実践者が主体的に研究に参加する手順の確立

1. 環境**NGO**インベントリー調査
↓
2. 「社会的ソフトウェア構築委員会」の開催
↓
3. ケーススタディの実施 (**PLA**による調査と**KJ**法の応用による分析)
(バングラデシュ**5**回、ネパール**1**回)
↓
4. 「社会的ソフトウェア構築ワークショップ」の開催(日本)
↓
5. アクションプランの作成

NGOインベントリー調査



バングラデシュ

1. **390**のNGOを対象に質問紙調査を実施
 - 既存の分野別(環境系)NGO Directoryから抽出
 - タスクフォール委員会、現地事務局NGO (SSS)の助言
2. **112**のNGOから回答
3. そこからNGOの規模、地域、関係を考慮して**18**を選出
4. **15**NGOの参加を得て「社会的ソフトウェア構築委員会」
☞ **Environment Coping Forum**を結成(ケーススタディ実施母体となる)

NGOインベントリー調査



ネパール

1. 現地事務局 (**Martin Chautari**) の助言により、政治状況などを考慮して、対象をカトマンドゥ盆地内の**NGO**に限定
2. 既存の**NGO Directory** (福祉局登録資料など) から選出した団体に、メールと電話で調査協力の打診
3. 返答のあった**NGO**に対して質問紙を送付
4. **50**の団体から回答
5. 環境分野でおもに実践的活動をしている**8**団体の参加を得て「社会的ソフトウェア検討委員会」を開催 (その中から**CDO**がケーススタディ開催事務局に選ばれる)

バングラデシュ・ネパールのNGO全体像をどの程度把握し、どのような選定基準で特定のNGOを選定したのか

- バングラデシュでは、既存の**NGO Directory**（環境系など分野毎の**Directory**が既存）に基づいてインベントリー調査を行った。選定においては、地域性や、現地コーディネーター（**SSS**）との関係、協力してくれそうな団体を考慮した。また、タスクフォース委員会からの意見も参考にした。
- ネパールでは**Directory**が整備されていないため、関係者の意見を重視した。政治的状況により、現地コーディネーター（**Martin Chautari**）の提案で、対象地域をカトマンドウ盆地に限定した。ケーススタディにおいては、**CDO**を中心に、調査可能な**NGO**を選出した。

ケーススタディ流れ



1. 担当**NGO**の活動紹介
2. フィールドスタディ(担当**NGO**の活動地域を中心に、**PLA**を用いる)
3. 各参加者の印象に残ったこと**3**つを、優先順位とその理由をつけて書き出す
4. カテゴリー×優先順位による分析(**KJ**法の応用)
5. 分析から見えてくる当該地域の特徴と有効な対策を考察

特徴と留意点



- 活動を通じた実践と適応の発見
- 日頃活動している**NGO**ワーカーによる経験と実践に基づいた直観的視点
- ベンガル語による参加型ワークショップ
(**KJ**法を応用した気づきの抽出と整理)
- このケーススタディは、**NGO**の調査地でのプログラムに対する批判や評価、助言ではない
- 村落社会や村が抱える問題に関する調査ではない

ケーススタディの概要



バングラデシュ社会的ソフトウェア構築委員会

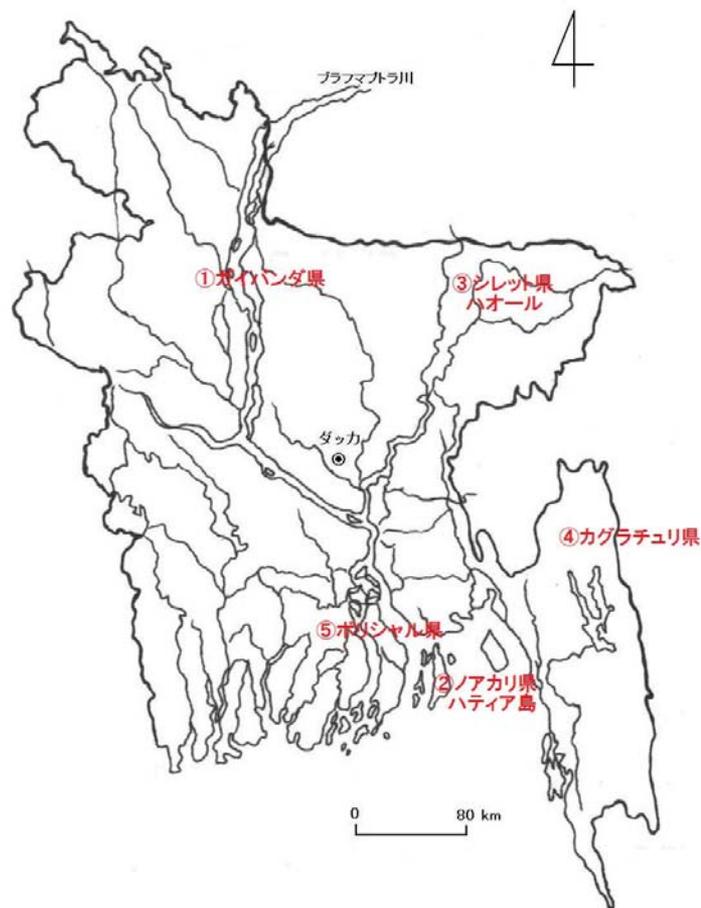
15NGOによる**Environment Coping Forum (ECF)**

PLA (Participatory Learning Action)

- 主体を当事者NGOに置く。
- NGOが活動を通して相互学習しあう構造。
- 調査より相互啓発的意味を重んじた**Learning Action**。

⇒ 担当NGOの活動を通して、環境と開発(生活改善)におけるNGOとローカルな人びとによる**Coping Mechanism**を見出す

ケーススタディ地域



第1回 ジョムナ川流域中州地域
(ガイバンダ県) 担当NGO: **SKS**

第2回 ベンガル湾島嶼部
(ノアカリ県ハティヤ島) **DUS**

第3回 サイクロン洪水被災地域
(ボリシャル県) **HCP/BDP/BSUS**

第4回 ハオール: 大規模湿地帯
(キショレゴンジ県) **POPI**

第5回 焼畑による土地劣化丘陵地
(カグラチュリ県) **TMSS**

ケーススタディの事例(バングラデシュ第4回)

担当NGO:POPI

People's Oriented Program Implementation, 1991年～

ハオール(大湿地帯)の災害対策と生活改善

活動分野

- マイクロクレジット
- 環境と災害対策
- 教育
- 保健衛生
- 人権
- 社会開発



調査地の概要(キシヨレゴンジ県)



琵琶湖との面積比較
(地上約70000マイルから見た様子)

雨季の様子



- 低い屋敷地耕地が、雨季には水面下に沈む
- 1988**年の大洪水により大部分の屋敷地が破壊
- 雨季には周辺の村に家財道具一式をもって移動

印象の共有



カテゴリー

- マイクロクレジット: **Micro Credit (MC)**
- 環境と災害リスクの軽減: **Environment (Env.)**
- 教育: **Education (Edu.)**
- 保健衛生: **Health**
- 人権: **Human Rights (HR)**
- 社会開発: **Social Development (SD)**
- 農業: **Agriculture (Agri.)**
- その他: **Other**

POPI
活動分野

項目 × 優先順位 (クラスター分析)

NAME	MC	Env.	Edu.	Health	HR	SD	Agri.	Other	Remarks for others
Minamide		3				1		2	Livelihood
Ando		2				3		1	Daily lifestyle
Nanigopal		1	2	3				4	
Rana		2				3		1	Livelihood
Yajima		1			3			2	Livelihood
Miyamoto		1,2,3							
Sazzad			3	2				1	Communication
Ayub		2	1	3					
Mizanor		1		2		3	4		
Pankaj		1					3	2,4	Livelihood
Hafizur		2				1,3			
Shampa		1	2	3					
Sharif		1		3		2			
Hamidul		1				2,3			
Kanchana		2		3				1	Livelihood
Bimal		1				3		2	Livelihood
Paresh						2		1,3	Livelihood
Nazmul		1		2		3		4	Livelihood
No.1	0	10	1	0	0	2	0	5	
No.2	0	6	2	3	0	3	0	4	
No.3	0	2	1	5	1	7	1	1	
Total		18	4	8	1	12	1	10	

優先順位1位

- 環境と災害リスクの軽減(18pt)
例) 波浪から屋敷地を守るシステム

- コンクリート製防波堤



**VDC (Village Development Cell/
Committee)** による屋敷地

- チャイラ草(イネ科多年草)による
人工波浪防除「ガエール」

- コロシの木

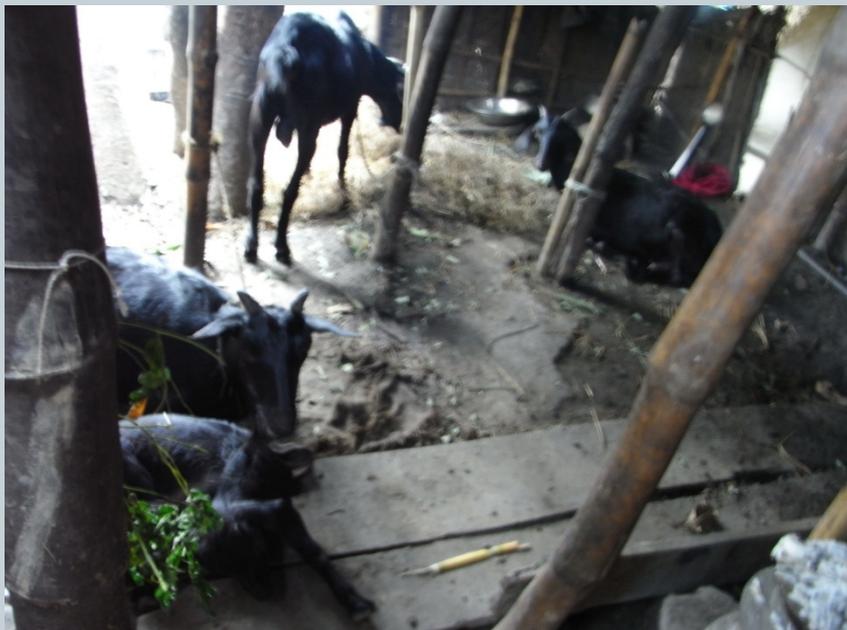




優先順位2位

- その他→**Livelihood** (暮らしと生活様式) 全体**10pt/2位4pt**

例) 人びとの生活空間と牛小屋が隣接(良好な衛生状況)



例) ゴボール・チョタ



優先順位3位

- 社会開発 (全体12pt/3位7pt)

例) **Group Federation**

→ 女性の活発な討議



- 保健衛生 (全体8pt/3位5pt)

例) **Health Service Boat**



「分析的表現」「論理化」へ



1位: 環境と災害リスク軽減

Technological Coping

2位: 暮らしと生活様式

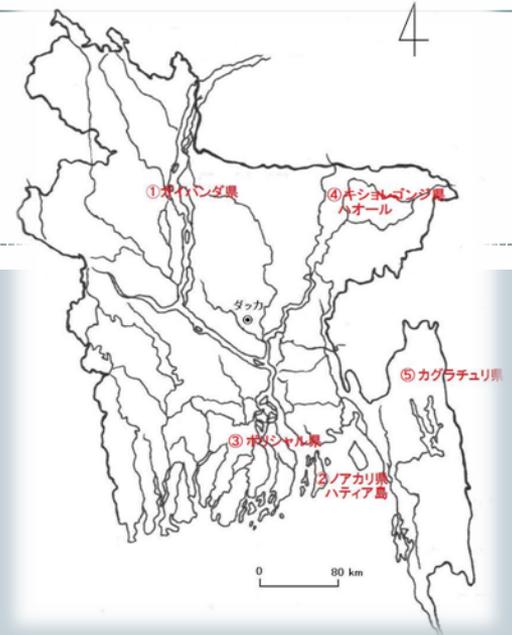
Livelihood Coping

3位: 社会開発

Social Coping

- ハオールでは、まず災害対策(フェンスや地盤強化)が不可欠であり、そのうえで、生活環境や社会組織が必要

「客観」化へ



👉 ガイバンダとの違い

- 1位: 暮らしと生活環境 = 具体的取り組み
- 2位: エンパワーメントなど = 間接的効果
- 3位: 既存の文化や人間性に対する配慮

- 昔から人びとはジョムナ川の流域変動、季節ごとの移動を前提に生活してきた。そこでの生活改善は、自然の脅威に暮らしを適応させる形でしか成り立たず、外来技術より既存の生活スタイルや技術を基にする。

👉 ハティアとの違い

- 災害の歴史が比較的浅いハティアでは、相互扶助関係が確立されておらず、社会問題の要素が強い。

Coping Mechanismの分類



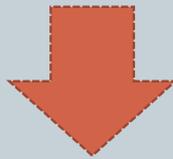
- **Technological Coping** (技術的適応)
- **Livelihood Coping** (暮らし面での適応)
- **Social Coping** (社会面適応)

⇒各地域の災害の歴史、社会構造、ニーズを抱える当事者の社会階層などの事情によって、**Coping Mechanism**の内容や優先すべき分野は異なる

研究の成果:「社会的ソフトウェア」の構築

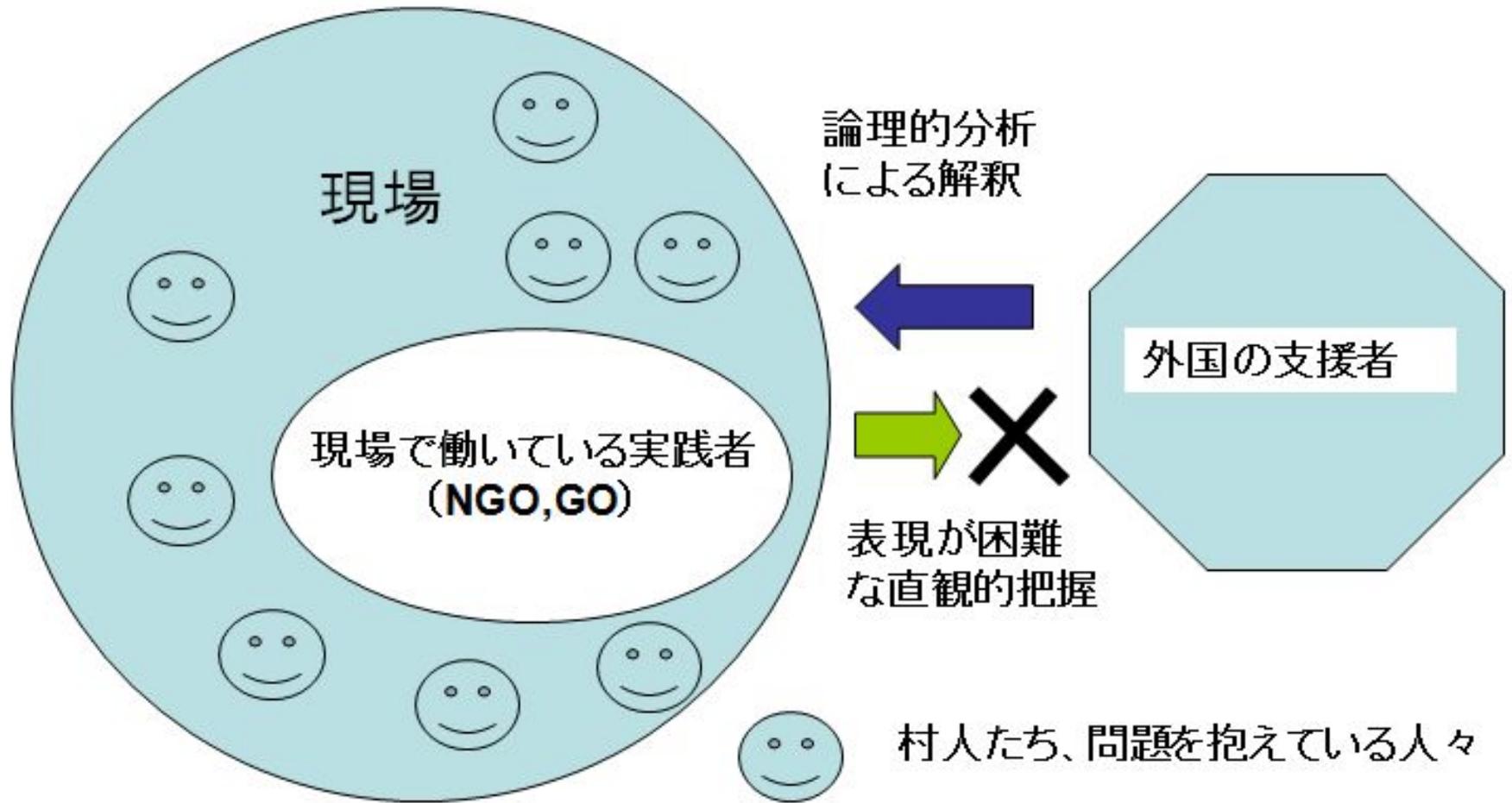


- ① 経験の具体的説明原理(客観性の付与)としての機能
 - 「直感」から「直観」へ:言語化・相対化のツール
例)カード表:見聞きしたこと/カード裏(理由):考えたこと
 - 直観的把握から分析的表現による「論理化」
例)カード分類による整理
 - 他地域との比較による「客観化」
- ② コーピングメカニズム実践例のデータベース的機能



アクション・プランへ

援助協力における問題とその解決



研究成果:アクションプランへ

- **PACT: Participatory Afforestation and Community Transformation**

例) Korash木による防波林植林の更なる展開

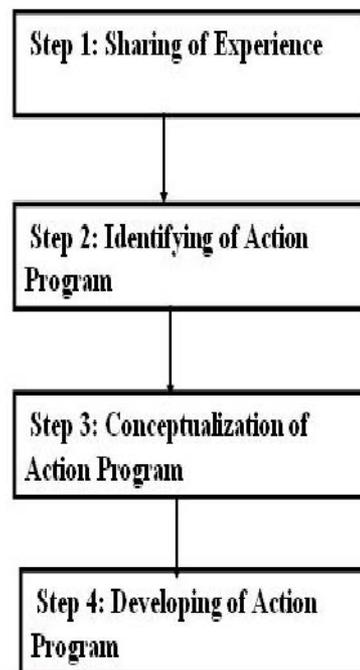
- **HELP: Health Education and Livelihood Program**

例) 米一握りのへそくり→Fish Bank

☞ *Environment Coping Forum for Action Research*

* 草の根の経験から生まれる企画をドナーに提示

Procedure of undertaking Action Program



研究成果: アラカルトアクションプランへの大使館コメント



- われわれのアクションプランは「**バスケット方式**」であり、小規模プログラム(予算規模:各**50**—**100**万円程度)を支援者に向けて**アラカルト**に提示する。在バングラデシュ日本大使館の援助担当者からは、本プロジェクト研究から提案される小規模プログラムは手間暇がかかるため、日本からの援助を得るのは難しいが、北欧系の**ODA**や**NGO**から援助を得る可能性はあるとの助言を頂いた。また、**アクションリサーチ**として、研究の枠組みの中での実施も検討する。

研究成果の意義、果すべき役割



- **NGO** 間の協働を促進するネットワークを構築
- 協働ネットワークをいかした最終的な小規模開発事業をアラカルト方式で、アクションリサーチの発展したものとして諸外国政府、民間の援助関係者とのテーブルにあげることが可能
- ボトムアップ型の援助関係者にとっても現場の小さな声が届きやすい、双方向のコミュニケーションを可能にした援助の仕組みをつくっていくこと

「新たな地域研究」の可能性、特に方法論とその実践についての展望



- 「社会的(当事者)ニーズ＝問題解決」を正面から据えると、分析的展開よりも、**問題をいかに解決するかという当事者性**こそが重要となる。本プロジェクト研究は、問題に対する「**自覚**」を中心に据えた研究アプローチである。地域研究が他のディシプリンと違うのは「**場**」が設定されることであり、だからこそ、**当事者ニーズを中心に据える研究が、地域研究においては可能となる。**
- 実践とは「当事者性」に他ならない。

本研究成果の汎用性について



- 抽出された個々のコーピングメカニズムは、例えば、ハオールでの防波林、牛糞の燃料利用、ガイバンダでの河川侵食被災住民の社会集団としての対応などは、その技術の使用されたている場の社会・生態環境に強く影響された社会的ソフトウェアとなっている。したがって厳密にはコーピングメカニズムの個別事例は、南アジア周縁地域(バングラデシュ・ネパール)に限定されるものである(=「社会的ソフトウェア」のデータベースとしての可能性)。
- 現場に即したコミュニケーションと「発見の客観化」のツールとして新たに展開した「社会的ソフトウェア」は、特定地域に限らず、他地域においても利用可能な汎用性を有している。

社会的ソフトウェアの新定義



「社会的ソフトウェア」を単なる事例集にとどめることなく、問題発見から分析、アクションプラン(具体的な対策)に繋げる一連の方法論として実践的に開発した。それは、NGOの実践者が持っている個別経験をいかに普遍化し、アクションプランとしてまとめあげていくかという組織化と論理化(技術化)の方法である。したがって、

**社会的ソフトウェアは事例集
調査、分析、計画のツール**

としての2つの内容をもつことになった。

「社会的ソフトウェア」について、世界銀行やNGOの評価



- **世界銀行**の担当者は、**グッドプラクティス**(=コーピングメカニズム)のデータベースとして、本プロジェクト研究を評価した。→プロジェクト申請時の「社会的ソフトウェア」の定義での評価。
- **NGO**からは(参加者の声を聞く限りでは)、自分たちの**経験を表現、分析**でき、アクションに繋がられることへの評価が高かった。→プロジェクトの実践の中で生まれた「社会的ソフトウェア」の新定義に対する評価。

プロジェクト研究の成果の発信状況



- 研究会3回(京都)
- 市民公開のワークショップ1回(東京)
- プロジェクト研究ホームページ <http://ecf.cseas.kyoto-u.ac.jp>
- プロジェクト ニュースレターの発行 8回
- 現地NGO (SSS)のニュースレターでの発信 4回
- 学会発表 7本
- 論文(短報) 3本

今後の展開



- 本プロジェクト研究で作成された小規模開発事業や社会的ソフトウェアを使ったアクションリサーチを実施するために、民間助成、ODA、JICA草の根技術協力などへ支援を受けるために、現地NGO などとともに本プロジェクト研究の成果を宣伝するとともに、積極的に助成申請に応募する。
- 本プロジェクト研究の研究面での展開は、「ベンガル湾縁辺における自然災害との共生を目指した在地のネットワーク型国際共同研究」(科学研究費補助金基盤研究(A) 安藤代表:平成21年度～平成25年度)で、実施している。
- 一連の研究のプロセスを社会的ソフトウェアの手引書的な本としての出版予定

総括

NGOスタッフという「当事者」の調査への主体的参加により、体系化するという当初の目的をほぼ達成することができた。体系化の方法をPLAとKJ法をもちいて工夫することで、地域研究において、実践者と研究者の連携により、当事者性を地域研究に取り組む方法を「社会的ソフトウェア」として具体的に提示できた。

今後は、「社会的ソフトウェア」という言葉をこのまま使うのかということを検討する必要があるが、実践的な研究方法として開発することができた「社会的ソフトウェア」を、地域研究や援助協力の実践の場で使用し、普及・発展させていきたいと希望している。